であれば多くの言語が分からなければいけないので、英語はもちろん他の言語も勉強しなければいけないと思いました。

石井先生がおっしゃっていた、「理学療法士をやっていて良かったと思うのは、今まで立てなかった人が立てるようになった瞬間の笑顔を見たとき。」という言葉を聞いて、理学療法士は、人が良くなる瞬間に立ち合うことができ、その喜びを一緒に分かち合えるものであると思いました。この良さは看護や福祉の仕事ならではだと思いました。私も将来は、人と喜びを共有し、人を笑顔にできるような仕事に就きたいと思いました。

また今回の講義を受けて、今の日本の社会での問題も感じました。世界には一〇人に一人が障がいを持っているそうで、途上国では障がい者も健常者と同じように普通に町で暮らしているそうです。しかし今の日本では昔よりは見かけるようになった気もしますが、町でそこまで障がい者の方が健常者と同じように働いたり活動している様子を見ることはあまりないような気がします。発展した国も、途上国から学び取り入れるべき仕組みもあると思いました。

今回の講義で理学療法士について多くの事を学び、また同時に身体障がい者に私たちがすべきことやできることについて考えることができました。

海野　遥香（3412）

私は将来、作業療法士になりたいと思っている。今回の講義を受けて、作業療法と理学療法の違いについてよく理解できたと思う。石井先生がおっしゃったように、患者が障がいを克服した瞬間の嬉しさを共有できるというのは、私もとても魅力的だと思う。海外でも日本でも、この仕事によって生まれる感情は同じなのだと思った。国境を越えて活動し、多くの障がい者を救うことで、障がいを持たない人との関係も深まっていく理学療法士という仕事にも興味がわいた。

作業療法とは違い、人間の基本動作に着目して治療するというのは簡単なことではないと思う。単に座学的な知識を得るだけでは患者を治療することはできない。きちんと臨床実習を受けて、技術を正しく身に付ける必要がある。「それぞれの仕事を実際に見たほうが良い」というのは本当にそうだと思った。だから、先生がオススメと紹介してくださったサイトの動画を見てみようと思う。

先生は海外で、障がいを持つ子どものために、その国で買ったクッションを使用して、障がいに応じた椅子を作ったり、大人用の車椅子を改造したりしていた。地元の人々も、それぞれの知恵をフル活用して廃材から装具を作ったり、ダンボールを座位保持装置に作り変えるなど、自分に「今」できることを考えて行動していた。私だったら先生や地元の人たちの様な行動はすぐにできるだろうか？経験が無い私にはできないだろうと思った。しかし、その行動ができるようになったら、どんなに素晴らしいだろう。そう思うと、やはりこの分野への関心は高まる一方で、大学に行って学びたいと思った。

もし大学で学んで、夢を叶えることができたならば、患者の「～ができるようになりたい！」という願いも夢でなく現実にすることができると思う。これこそ、先生のおっしゃっていた感動の共有であり、理学療法の魅力なのだと感じた。

学部の選択があります。自分のこれからを決める大きな選択です。やりたいことをやれるのが一番良いとは思いますが、先生のように楽しく過ごすことができるのも大切だと思います。夏休みの三者面談までに、まだ少し時間があるので、もう少しだけ自分の進路についてじっくり考えてみようと思いました。

ビジネスの国際化と異文化マネジメント

高崎経済大学　経済学部　佐藤　敦子　先生

箱﨑香菜子（2126）

私の現段階での進路は「経済学部」ではなく、「経営学部」や「商学部」に進もうと考えています。しかし、前段階では「経済学部」も考えていたので、今回の講義を受けて改めて考えようと思い、受講しました。佐藤敦子先生はとても気さくな方で、国際的に活躍なさってきたらしく、その経験が周囲の人に評価され、今では高崎経済大学の先生となられたらしいです。そんな素晴らしい先生を招き、今回「ビジネスの国際化と異文化マネジメント」というテーマで、グローバル化が進む現代に必要な国際性、コミュニケーション力、異文化社会、ビジネスのあり方についての講義を受けました。その中でも特に印象に残っていることがいくつかあります。一つ目は日本企業が海外での事業拡大を図るために多くの会社が海外へ進出していることです。特にトヨタ自動車は利益だけでも三億円を越えるほど、海外で成功をしているそうです。また、多くの会社が主に中国やタイ、インドネシア、アメリカなどへの拡大を図っています。機能としては第一に販売、そして生産や研究開発、物流を目的としています。二つ目は海外進出をする上での社員の雇用状況についてです。生産し、販売する中でも、輸出が厳しいものに関しては現地の材料や人材を必要としなければなりません。そのため近年では外国人を正式な社員として採用している企業がおよそ四四%もあります。このようなことを導入したことで、海外での事業が円滑に行われることができています。三つ目は外国との交流が盛んになったことで、コミュニケーション力が必要不可欠となってきたことです。日本は特に昔から日本人の独特な国民性が強く、全体的に社交的ではないので、グローバル化が進む中で他国の言語を話せるようになることがとても重要視されています。言語の中でも特に重要とされるのが、やはり英語です。佐藤先生曰く、英語はほとんどの国や地域で使われているので、英語を身に付け、自分の強みとしていけば海外でも十分に戦えるそうです。また、最近では英語だけではなく、中国語やスペイン語など他の言語も取り入れていくことの重要性も高まってきているそうです。これらの講義内容から学んだことは、これからの時代、より一層他の国との交流が増えてくることは明確なので、多様な言語や文化、宗教などを理解し、自分自身の思いや考えを伝えるためにコミュニケーション能力を高め、そして、海外でも先頭となって活躍していけるようにリーダーシップや考え方の柔軟性、カリスマ性に磨きをかけていくことが重要だということです。私は正直、英語が苦手です。しかし、自分の将来のことを考えると、今まで以上に頑張らなければならないと感じました。また、自分の進路の視野を広げる上で、今回の佐藤先生の講義を受けて良かったと思いました。

北村　梨乃（3209）

私は普段テレビなどで、現代社会において、グローバル化に対応できる人材が必要とされているということをよく聞きますが、実際、具体的にどのような人材なのかわかりませんでした。そこでこの講座を受講しようと思いました。私が今回の講義を受けて一番驚いたことは、今は「英語」を話せるだけではだめだということです。現在の世界人口で最も多いのは中国であり、そのため、中国語を話す人が英語を話す人より多いということは、とても驚きました。将来的には英語を話せる人になりたいと考えていましたが、中国語も話せるようになってみたいと思いました。

また、近年日本では少子高齢化が進んでおり、その分、企業の海外進出も進んでいるということも分かりました。佐藤敦子先生が実際にアメリカの企業で働いていたという体験談を聞き、様々な言語と文化の人がいるということがわかりました。そして、そこから「異文化理解」が必要であるということがわかりました。日本では他の国に比べて、海外を拠点として行う経営においてかなる日本人駐在員の人件費が多いということもわかりました。そして、一番変えなければいけないのは自分の意見を述べ、感情表現できる人だと思いました。日本人は、他の国より感情をあまり表に出さず、競争を避ける傾向があり、私にもあてはまるので、直していきたい部分だと思いました。今回の講座を通して、国際ビジネスで求められる人材を先生の体験をもとに理解することができました。私も文化多様性があり、語学力があり、異文化理解ができ国際化している社会で活躍できるような人材になれるよう大学にいっても頑張りたいと思いました。

免疫学の基礎と研究の最前線

東京理科大学　基礎工学部　西山　千春　先生

堀川　隼乃（2736）

私はすでに進路は決めていて、常にそこに向かって一生懸命勉強をしているのですが、今日の講義を聞いて、免疫や生物学に少し興味が出てきました。一年のときに生物基礎で習ったところで曖昧になっていたことが、実はきまった細胞がきまった働きをしていることを初めて知り、より深く理解することができました。今、国語の朝自習で「臓器移植について」の記事を読み感想や意見を書いたりしていますが、この講義の中でも臓器移植についての話題が出てきて、移植の大変さがよく分かりました。

また、アレルギーについての話では、ある特定の抗体が過剰に反応することで起こるのがアレルギー反応だということを知りました。そしてその抗体を発見したのが日本人だということを聞き、さらに驚きました。私は、花粉症やアトピー、ぜんそくなどのアレルギーは持っていないのですが、先生が「最近アレルギーを何も持っていない健康な人を探すのが難しくなっている」とおっしゃっていたので、もしかしたら私も自分では気づいていないけれど、アレルギーを持っているかもしれないなと思いました。

先生は、講義以外にも、進路選択の話をしてくださいました。数学が楽しくて東大の理科Ⅱ類に行ったけれど、高校と内容が全く違っていて、さらに難しくなっていたために、数学を諦めたこと。たまたま入った学部が、中学時代にやっていた部活をやれて楽しかったこと。理系とは言えど、英語がとても大切であること。今の自分では分からないことを、先生はたくさんお話ししてくださり、とても勉強になりました。

今、一つの目標に向かって頑張っていますが、この講義をきっかけに、自分の進路に対する視野が少し広くなったように感じました。これから、大学・学部の選択があります。自分のこれからを決める大きな選択です。やりたいことをやれるのが一番良いとは思いますが、先生のように楽しく過ごすことができるのも大切だと思います。夏休みの三者面談までに、まだ少し時間があるので、もう少しだけ自分の進路についてじっくり考えてみようと思いました。

草野　瑞貴（3420）

私は文系ですが、生物基礎や陸上競技部で免疫について学んだことの先をこの講座で学ぶことができてよかったと思いました。陸上競技は自分との戦いなので、スポーツ科学や免疫学、栄養学などを任意で学びます。今まで学んだことを、大学教授の方から教えていただくというのはいい経験になったと思いました。

高校の教科書（私は文系なので生物基礎）では、ただ単に暗記させられるものが先生の講義ではより詳しく、濃く説明されていて、本質がわかるのは楽しいと思いました。ひとつひとつのことを取りあげて緻密に理解をしていくことは、理系だけではなく文系にも不可欠なので、細かい勉強もダイナミックな勉強もしようと痛感しました。

高校で生物基礎を学び、陸上競技部で浅くではあるけれど、免疫学やスポーツ科学、経穴について学びました。勉強であれ、スポーツであれ、大事なことは実生活に活かし、役立てることが大切だと思います。今回学んだことを実生活に活かし、よりよい日々を送りたいと思いました。

迫りくる大学受験に向けて、日々の勉強はもちろん、健康な体を試験当日まで維持し続けることが必要となります。そのときに役立つのが、これまでに学んだことです。免疫の仕組みを知っていれば、インフルエンザのワクチンを打ったり、リンパ節が集まっている部分をマッサージしたりすれば、何も知らなくて行動していない状態よりもより健康でいることができます。今回、「免疫学の基礎と最前線」で学べたことを実行に移して、より健康的に生活し、大学受験を乗り切りたいと思いました。

十八歳と民法 ～できることとすべきこと～

新潟大学　法学部　石畝　剛士　先生

北尾　水音（2110）

出生時点で権利義務の主体とされ、権利能力が備わり五歳から六歳で物事の善悪を判断できるとされ過失相殺能力、事理弁識能力が備わる。七歳から八歳では意思能力（自分のなしている行為の法的な意味を理解できる精神能力）が備わり、さらに十一歳から十三歳では自己の行為が不法な行為であって法律上の責任が生ずることを理解し得る責任能力が備わる。十七歳の私はすでにこの四つの能力を得ていると知ってとても驚いたし、自分がしている行動の意味をよく考えて、責任のとれる範囲で行動していかなければいけないと思いました。また自分の法律上での立場を今まで全く知らずに生活してきたことは怖いことだと感じました。二十歳になると行為能力（有効な法律上の行為（契約など）を単独で確定的に行うことができる法律上の資格）を備え、成人とみなされるようになるので、あと三年で完全に「自立・責任」を持って成長できるようにしなければならないと知って、何となく焦ってしまいました。今回の講義では、法律についてだけでなく、法学部の有利な点や、大学選びのポイント、各大学の法学部の特色なども教えてくださって、学ぶことがたくさんありました。充実した時間が過ごせたと思うので、今日教わったことを今後の生活や進路選択に役立てていきたいです。

小松　七波（3422）

今の自分が法律的にどの立場にいるのかということを講義していただいた。私たちがほとんど毎日おこなっている買い物も契約の一つだということは家庭科の授業でも取りあげられ知っていたが、親が契約を無効にできる取消権という権利をもっていて、未成年者の契約を取り消せるということをはじめて知った。未成年者が単独で行える契約は日常品のみという非常に狭い範囲であることとあわせ、自分は世の中のことを知っているつもりでいるが、実はまだまだ知らない世界が広がっているのだと講義を聞きながら感じた。また、意思能力、行為能力、責任能力、事理弁識能力、権利能力が備わる時期も細かく分かれていて、十歳にもなっていない子供にも三つの能力や権利があるのであるから、親のしっかりとした教育がないと事件やいらない契約を結ばされるなど大変なことになると思った。私は、責任を負うのは二十歳になってからだと思っていた。私と同じように考えている人も多いのではないだろうか。だから、法律に興味がある人だけが知っていればいいのではなくて、生きている人たちみんなが法律を知って注意して生活しなければならない。法を知ってもらうような講義をたくさんやっていくと事件に巻き込まれる人も減ると考えた。今回の講義では、難しい権利の説明も私たちに分かりやすいように簡単な言葉に直して説明していただき、自分たちの立場がどこであるかという親しみやすい内容だったということもあり、すごく楽しく充実した時間を過ごせた。一年生の頃から法学の道に進みたいと考えていたが、改めて法律の楽しさに触れ、いっそう法律を学びたいという気持ちになった。私は新潟大学に行きたいので、今回志望大学の先生から直接お話しを聞け、もっと勉強して絶対にこの大学に行きたいという強い気持ちを確認できた。

対人関係の発達心理学

福島大学　人間発達文化学類　高谷理恵子　先生

渡邊　美南（2335）

〝対人関係の発達心理〟と聞いて少し堅い話をイメージしていたのですが、思っていたよりも聞きやすく分かりやすかったです。まず、様々な種類の心理学があることは知っていましたが、アドラー心理学や人格心理学、認知心理学など初めて聞く心理学の種類もあり、心理学の応用の幅広さに改めて驚きました。基礎となる〝実験心理学、人格心理学、社会心理学、発達心理学〟が私達の心の働きを構成しているということを初めて知ったので、より「人間」について興味が湧きました。

今回の講座の中心となった〝愛着（アタッチメント）〟は子どもの発達段階によって、誰に対しても見えるものから特定の人に対する行動へ変わり、最終的に協調性という関係へと繋がっていくことを知り、人間の発達の面白さを深く感じることができたと思います。

その中で一番興味を持ったものが、〝愛着が子どもの発達において持つ意味〟というものです。人間は新しいもの、人、場所などの新奇刺激に出会う時、好奇心と不安や恐れという二つの感情を感じ、愛着行動によって不安や恐れの軽減をする、という話にとても感心しました。自分が幼い頃に新しい世界に好奇心をもって飛び込めたのは、両親との間に愛着をもつことができていたからだと分かりました。また、大人になってもこの感情をもつことができるのは人間だけであるということが面白かったです。

戦争という名の「行政」

福島大学　行政政策学類　荒木田　岳先生

馬目有依子（2428）

戦争というものは、国と国どうしが自分たちの国のために戦い、それを引き起こしたのは政府や軍人だと思っていました。実際は、戦争は軍部だけのものではなく、一般人も積極的な参加をしていた、という内容をこの講座で学ぶことができました。戦争は、残酷であり、死者も多く、日本に何一つとして良いものをもたらしていないイメージでしたが、戦時体制の中で、人々の平等化が進み、配給制になると、貧しい人と金持ちの格差がなくなり、貧しい人は、金持ちに対してインパクトの強い標語（「パーマネントはやめましょう」、「ぜいたくは敵だ」、「欲しがりません勝つまでは」など）で発言するようになりました。江戸時代の人々は、武士の子は武士、庄屋の子は庄屋、というように、伝統的支配と呼ばれる、自分の身分に何も疑問を持っていませんでした。しかし十九～二十世紀ごろになると、平準化＝現代化の時代となり、「なぜ同じ人間に生まれたのに、同じ人間ではないのか？」という発想が生まれ、貧乏人と金持ちの格差が生まれるようになりました。だから、戦争は、貧乏人が金持ちへ発言できたので、一般人のほとんどをしめる貧乏人は、自分たちの生活をよくするために、政府、軍部、国民が一丸となる総力戦で、戦争を進めました。私は、戦争は国が一丸となり戦っていたことは知っていましたが、一般人が戦争に賛成していたことにびっくりしました。また、貧しい人々が発言でき、金持ちとの差をなくすことができたという点は、この講義を受けていなかったら分からなかったと思います。一〇〇年ほどしか昔でないのに、今とは違う感覚で、時代の流れは面白いと思いました。上層部の人が下層部をまとめるのは、今も変わっていませんが、一時期はその逆もあったと思うと、今もできる気がします。今の社会は、戦前の社会と似た状態のようで、近いうちに日本も戦争を始めるかもしれません。新聞記事もよく似ているらしく、調べてみると面白そうなので、機会があれば調べてみようと思いました。

菜花加奈絵（3432）

私たちに今にも近づいている戦争という脅威に不安をますます感じました。私は父と政治や社会全体のことについてよく語っているので、とてもこの講義は興味深く、より知識を深めることができたのでよかったと思います。特に印象に残っているのは、戦争は当時、国民全体が望んでいたという言葉です。すなわち、国民が主体となり戦争が進み、決して戦争を遂行した軍部だけが全て悪いというわけでないこと。そう考えてみると、国家総動員法などの挙国一致を掲げる法律があるのにも合点がいきます。そしてこういう時代がもう目の前まできていることに恐怖を感じました。それを防ぐためには国の戦争遂行賛成の声に逆らう勇気と行動が必要だと思います。ロバート・ジェラリーが「ヒトラーを支持したドイツ国民」で著したようにもう手遅れかもしれません。ましてや今は、共謀罪が可決されてしまい、国民の行動が監視される社会が訪れようとしています。二度と同じ過ちをくり返さないためにも戦争化してゆく社会を止めは全く違うと思っていましたが、大型動物で子育てする動物にも愛着行動があり、子どもの時期に好奇心があることなど、人と動物にも似ているところがあると思いました。そして、愛着の発達四段階を詳しく知ったとき、どの段階も自分が経験してきたことばかりで、なつかしく思いました。私は、幼少期にとても人見知りをする子で、母親が自分の見える範囲にいないとすぐ泣く子でした。周りの人から言われるたび、自分だけなのかなとか、他の人はそんなことないのかなとか不安になったりしたこともありましたが、先生の講義を聞いて、安心しました。また、自分の家族を認識し、相手の気持ちを理解し、愛着行動を示すまで、三、四年かかるということにはとても驚きました。もっと早くから理解しているのだと思っていました。自分にとって本当に必要な人なのかどうかを小さいときから見分けているように感じました。

上遠野　楓（3311）

今回「対人関係の心理学」の講座を受講して、本当の「愛着」の意味や子どもにとって母親とはどのような存在なのかを理解することができました。私の思っていた以上に心理学の種類が沢山あることに驚きました。また、心理学の奥の深さにとても魅力を感じました。

講座では、親子関係の形成について学びました。私の思っていた「愛着」と心理学の「愛着」の意味はとても違っていて、心理学の「愛着」の意味にとても魅力を感じました。人と動物心理学についてあまり詳しくはなかったので、今回の話を聞いて新たに心理学の深さや広さ、面白さを感じることができました。進路選択においてもとても興味深い内容で良かったです。